

〔研究ノート〕

仏教絵画とマニ教絵画の高僧伝絵

—掛幅形式の画面をめぐる—

先般開催した開館50周年記念特別企画展Ⅰ「信仰と絵画」では、当館の「六道図」をはじめとして、国内に現存することが確認されたマニ教絵画を一堂に展示しました。会期中の6月5日には「国内に現存するマニ教絵画の諸問題」と題した国際シンポジウムを開催し、多くの知見を得ることが出来ました。

マニ教絵画はこれまで、ウイグルやトルファンから出土した10世紀から11世紀頃の断片的な遺例が知られるのみでした。今回展示した一連のマニ教絵画は何れも中国・元時代に描かれたものであり、時代も地域も大きく異なる両者の比較が可能となりました。シンポジウムでも、一連のマニ教絵画の「縦」と「横」のつながり、すなわち、マニ教図像の不変な部分と変容した部分、元時代に描かれた仏教絵画との表現の比較が話題の一つでした。シンポジウムを通じ、教義同様、図像や表現においてもかなりの柔軟性の高さを見せる、マニ教絵画の特色を再認識できました。今後、複雑に絡まり合うマニ教・仏教・道教・景教図像を丁寧にほどこいていく作業、具体的には、どの部分がマニ教オリジナルの図像なのか、どの図像が影響関係にあるのか、詳細に検討する必要があります。このことは、「仏画」が中心で、作例の限られた当時の江南地域の絵画制作の様相を明らかにする上でも鍵となる重要な課題です。

さて本稿では、展示したマニ教絵画の一点、「聖者伝図」(図1、以下、本図と略称)に着目します。本図は、マニ教における高僧伝絵と称すべき作例です。画中には、赤い縁取りの白い衣を羽織ったマニ教僧侶が繰り返し登場します。中心となる人物には頭光が描かれており、独立した尊格(おそらくマニ)として扱われていることが分かります。引率された複数のマ

ニ僧と共に異時同図で表現されます。画面上部から下部へと場面は展開しており、大海原での航海、上陸、マニ教寺院の建立及び信者の帰依の様子が描かれています。典拠となる文献は不明であり、描かれた内容の詳細は残念ながら分かりませんが、仏教徒を中心とした異教徒へのマニ教の布教とその成功を図示したものと理解されます。この、描かれた内容の明快さが重要です。本図の解釈はおそらくこれで正しいと思われる。

ところで、本図とよく似た性格を持つ絵画として想起されるのが、掛幅形式の画面に描かれた高僧伝絵でしょう。「聖徳太子絵伝」や「法然上人絵伝」、「親鸞聖人絵伝」などが数多く伝わっています。現存する掛幅形式の高僧伝絵のほとんどが、この三名の高僧に関わるものであり、中でも浄土真宗系の教団によって制作・流布した作例が多いことが知られます(若杉準治「高僧伝絵」『高僧伝絵』展覧会図録、京都国立博物館、1984年)。

その画面構図ですが、先行する絵巻を元に、各場面を段状に積み上げ、霞で区切ったものです(図2)。従って現存作例の多くが、画面下部から上へと場面が展開します。こうした大画面の掛幅に高僧伝や縁起絵が描かれる契機として、「絵解き」が挙げられます。文字通り、祖師の事績や社寺の縁起、あるいは教義について、絵画を用いて解説することをいいます。中国では唐代からすでに行われていたことが知られますが、日本では、藤原頼長が著した『台記』(康治二年(1143)十月二十二日条に、四天王寺において聖徳太子絵伝の絵解きが行われた旨の記事があり、平安時代後期には行われていたことが分かります。鎌倉時代後半になると、大衆への布教のため、特に浄土真宗系

の教団では盛んに行われるようになります。この頃、掛幅の高僧伝絵も制作のピークを迎えます。

ところで、シンポジウムでのグラーチ氏の発表にありましたが、マニ教はその初期の段階から、教義の解説や布教に積極的に絵画を用いたことが知られています。4世紀のシリアで活躍したキリスト教徒、エフレム・シルスによれば、マニは自らの教え・世界観を視覚化し、効果的な布教の道具として使用していたといえます。もちろんそこには、釈迦の伝記や、その前世の物語である本生譚を視覚化してきた仏教美術の影響が大きいと考えられます。けれども本図の他、今回展示した「六道図」や「宇宙図」を見ると、元時代のマニ教においても、その伝統は脈々と受け継がれていたことが伺えます。

マニ教絵画と仏教絵画では、共通する図像や表現が多数認められました。元時代の仏画において、本図のような掛幅形式の高僧伝絵にあたるものは遺されているでしょうか。特定の祖師の事績を表すという点では、遺されていないように思われます。ただ、表現の比較例として展示した「王宮曼荼羅図」(大恩寺蔵)、「法華経変相図」(道隆寺蔵・覚城院蔵)は注目されます。前者は『観無量寿経』『序分義』の内容を絵画化した作例であり、画面は下から上へと展開します。後者は『法華経』『序品』あるいは『勧発品』の内容を絵画化したものです。特に道隆寺本は、当初からなのか慎重に判断せねばなりません。場面に対応する経文の一部が画中に記さ

れ、経典の内容が理解し易くなっています。実際に絵解きに用いられたか否かは別として、何れの作例も、絵を見ただけでそのストーリーを理解することが出来る点では共通しています。マニ教絵画と仏教絵画の共通性を考慮するならば、このような経典変相図だけでなく、掛幅形式の高僧伝絵や説話画も描かれていたのではないのでしょうか。

日本における掛幅高僧伝絵、説話画は、鎌倉時代後半頃から盛んに描かれるようになりますが、14世紀・元代の中国においても、同様の機能が見出せる作例が描かれていました。もちろん、鎌倉時代には多くの祖師たちが宗派を興し、法統を伝える重要な役割として祖師の事績の絵画化がなされ、個別の事象ごとに事情のあったことは言うまでもありません。ただ、祖師の事績や教義の一端を分かり易く広めるために、大画面の掛幅という形態が流行した背景には、元代の江南地域の絵画と何らかの影響関係があったのではないかと想像したくなります。一連のマニ教絵画、とくに「聖者伝図」は、絵解きの問題、あるいは日本における大画面形式の掛幅説話画の成立、絵巻から掛幅形式への展開を考える上でも示唆を与える、重要な作例といえるでしょう。(古川攝一)

※図1は、特集図録『マニ教絵画』大和文華館、2011年、図2は、『真宗重宝聚英』第七巻、同朋社出版、1989年、より複写致しました。



図1 「聖者伝図」(個人蔵)



図2 「聖徳太子絵伝」第六幅(本證寺蔵)